遺物撮影実習
実際に出土遺物を使用して大判カメラによる遺物撮影実習をおこなっています。中には初めて大判カメラに触れる研修生もおり、四苦八苦しています。

暗室処理実習
撮影したフィルムは各自現像・焼き付けをおこない、実際に図版レイアウトまでおこないます。

［講義題目］〈〉内は外部講師
小型カメラの基礎知識〈東　義彦〉、
大型カメラの基礎知識〈杉浦秀昭〉、
感材の基礎知識〈村井敏男〉、
デジタル写真の基礎知識〈川瀬敏雄〉、
埋蔵文化財写真の基礎知識、報告書と写真図版、
遺物撮影の基礎知識、暗室処理の基礎知識、
美術工芸品の撮影〈金井杜男、勝田　徹〉、
遺跡撮影の実際〈幸明綾子、村井伸也〉、
遺物撮影ライティングの基礎〈玉内公一〉、
遺跡遺物撮影・暗室処理実習、暗室・スタジオの設計、
製版・印刷の基礎知識〈宮内康弘〉、
写真画像の評価と判定〈井本　昭〉

（平城宮跡発掘調査部　中村一郎）

渤海国上京竜泉府禁苑跡の調査

遺跡研究室では、古代庭園に関する調査研究を研究の一方の柱としていますが、それに関連して「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」（科学研究費：代表者高瀬要一）をおこなっています。今年度は、中国黒龍江省寧安市所在の渤海上京竜泉府禁苑跡を調査対象とし、6月下旬、高瀬、小野のほか研究分担者である藤井英二郎さん（千葉大学）、白志星さん（韓国全南大学校）、さらに現地事情に詳しい小嶋芳孝さん（石川県埋蔵文化財センター）などの参加を得て、現地調査に赴きました。

上京竜泉府禁苑の池北部の二島（南東から）

渤海は、7世紀末から10世紀初頭にかけて現在の中国東北地方を中心に成立した国家。日本との交流も、神亀4年（727）を初めとして渤海使の来日34回、日本からの遣渤海使13回という、当時としては頻繁なものでした。渤海国は8世紀代には何度か都を移していますが、9世紀初頭から滅亡に至るまでのあいだ都であったのが上京竜泉府です。上京竜泉府については、戦前、東亜考古学会が現地調査をおこない、成果は『東京城』（1939年）として刊行されています。

私たちの一行は、今回、黒龍江省文物考古研究所などの配慮で、禁苑跡を自由に踏査することを許されました。禁苑は宮殿区の東に位置し、土塁で囲まれた東西約200m、南北約300mの区画。中央やや北よりに南北に長い楕円形の池があり、その北方に禁苑正殿の礎石が残っています。さらに池の北部には、東西二つの築山状の島が並び、それぞれの頂部にも礎石が残っています。これらは、『東京城』所載の図の状況を残しており、60年以上にわたってほとんど手付かずであったことを示していました。そうしたなか、『東京城』所載図にない「発見」となったのが池南部の隅丸方形の低い島の所在です。現地を何度か訪れたことのある小嶋さんもこれまで気付かなかったとのこと。今回は、池底が比較的乾燥していて池の中もなんとか歩ける状態だったのが幸いしたようです。もちろん、黒龍江省側は南の島の存在は認識していて、付設の博物館に展示してあ

る模型にはちゃんと表現されていました。とはいえ、こんなことも『東京城』を読んでいただけではけっしてわからないこと。あらためて現地で実物に接することの重要さを感じた次第です。

（文化遺産研究部　小野健吉）

研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部　考古第一調査室

飛鳥藤原宮跡発掘調査部には考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室、史料調査室が置かれています。考古第一調査室は土器等の遺物の調査研究を担当し、考古第二調査室は瓦・金属器・木器等の遺物を扱うと定められています。しかし当調査部は平城宮跡発掘調査部より組織が小さく、発掘調査で出土する多様で膨大な量の遺物の整理には、組織図どおりの分業では不適合な部分があります。そのため、遺物については瓦・土器・木器（瓦と土器以外を扱う）の３つの整理班を編成して作業を進めています。考古第一調査室の対象とされている土器類は、土器整理班を中心に整理・分析・研究をおこなっています。

日常的な作業は、現場から運ばれてくる土器の水洗、分類、破片の接合と復原、実測、データ処理などの基本作業が中心です。現在は主に吉備池廃寺と飛鳥池遺跡の報告書刊行にむけて、整理作業や実測図作成などをおこなっており、いそがしい毎日が続いています。

飛鳥藤原地域は、７世紀の約１世紀のあいだ日本の都でした。この地域から出土する様々な遺物は、律令国家の成立過程を明らかにしていく重要な資料です。土器もそのうちの主要なものの一つで、どんな遺跡でも必ず出てくる普遍的な遺物です。土師器・須恵器を中心として、７世紀にこの地域で使われた土器の様相を明らかにしていくことが研究課題です。土器の編年や作られた産地の問題など、課題はたくさんあります。また宮都で使われていた土器という性格から、全国各地の同時代の土器研究への関わりは大きいと考えられます。７世紀の土器様相の基本的な変遷についてはこれまでにも『学報』などで公表してきましたが、今後さらに詳細な研究成果をあげていくよう努力しているところです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　安田龍太郎）

平城宮跡第一次大極殿復原工事

第一次大極殿正殿復原工事は、2001年度までに、大極殿基壇基礎造成（1,795㎡）、木材の調達、基壇化粧石材の調達、工事用地の仮設盛土（53,150㎡）、仮囲いおよび進入口の設置、木材保管庫（1,505㎡）・木材加工場（1,505㎡）・加工原寸場（2,005㎡）・一般公開施設（720㎡）などの仮設物の建設等が発注されています。

大極殿基壇は鉄筋コンクリート躯体に凝灰岩切石の貼り付けを行うもので、平城宮跡でも出土している兵庫県高砂市宝殿産の黄色凝灰岩「黄竜山石（キタツヤマイシ）」を使用します。また、基壇基礎に使用するコンクリートは、乾燥収縮低減剤を添加した通称「五百年コンクリート」を使用しています。

2002年度は、大極殿基壇基礎内に免震装置の設置工事および木材調達、柱礎石の据え付けなどが契約されており、近く素屋根建設工事の発注が予定されています。また、９月から、基壇の化粧石材の加工貼り付けが始まりました。

（平城宮跡発掘調査部　渡邉康史）

大極殿基壇の地覆石

博物館学実習生の受け入れ

一昨年度からおこなっている博物館学実習生の受け入れも３年目をむかえました。今年度は９月２日から６日までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。実習生は帝塚山大学から６名、奈良女子大学から２名、京都橘女子大学、東京農業大学、専修大学、徳島文理大学、大阪明浄大学から各１名の計13名と、昨年度の８名に比べるとかなり増加しています。また、学生の専門も文化財だけではなく、日本文化や造園というように多岐にわたっています。